

## New Face

### 倉橋映里香 (日本学術振興会特別研究員)

皆様こんにちは。倉橋映里香(くらはしえりか)です。2006年3月に東京大学大学院理学系研究科において無事学位を取得いたしました。学位論文のタイトルは“Evolution of Solid Materials in the Protoplanetary Disk: Constraints from  $^{26}\text{Al}$  Ages and Cosmochemical Properties of Chondrules in a Primitive CO Chondrite (原始惑星系円盤の固体物質進化: 始原的COコンドライトコンドリュールの $^{26}\text{Al}$ 年代と宇宙化学的特徴による制約)”です。初期太陽系における固体物質の起源と進化の解明を目指すという壮大なテーマに挑みました。学位論文の内容は大きく4つにわけられます。変成をほとんど受けていない炭素質コンドライトの主要構成物であるコンドリュールについて、1) 放射性元素である $^{26}\text{Al}$ を用いてコンドリュール形成年代を特定、2) 得られた年代情報が本当に変成を受けていないかどうかを岩石学的に検討、3) 個々のコンドリュールの全岩化学組成を取得し普通コンドライトと比較、4) 最終的に原始惑星系円盤におけるコンドライトの形成について、年代と岩石学的特徴の両方を矛盾なく説明するモデルを提案しています。1) については以前、本誌面にてご紹介させていただきました(遊星人, Vol.14, no. 1, p. 10-16, 2005)。後半に関しては、またいずれ改めてご報告させていただきますと思います。

さて、前述に『無事』学位を取得」と書きましたが、博士号の取得は想像以上に長い道のりでした。せっかく自己紹介の機会をいただいたので、これまでの歩みを振り返ってみたいと思います。

小さい頃から星や銀河が大好きで、図鑑を眺めたり星座早見表とにらめっこしたりしていました。中学生



の頃に「将来は何の分野でもいいからエキスパートになりたい」と思い、それならば大好きな宇宙を研究する研究者になろうと考えていました。高校では図書館でNewtonを読みあさり、宇宙への熱い想いを馳せていましたが、大学は残念ながら志望した所(北大)に縁がなく、勉強の対象を地球に転換することになりました(早稲田大学教育学部理学科地球科学専修)。地球のエネルギーを肌で感じることができるフィールドワークが特に大好きで、今でも川を見ると露頭を探しにジャブジャブと川を歩きたいと、ついウズウズしてしまいます。学部の卒業研究では、プレート境界における物質の挙動を解明するため、中国の超高压変成岩を用いて沈み込み帯における岩石テクトニクスを明らかにしました。

大学で勉強するにつれ、興味を持つ分野がいろいろと広がる一方で、宇宙への憧れは消えませんでした。将来的にどのようなテーマを勉強するかでかなり悩んだ時期もありましたが、最終的には初志貫徹で宇宙関係の道に進もうと決心しました。そして、人生の転機とも言える出会いがありました。それは学部3年

の時に思い切って飛び込んだ「惑星科学夏の学校」です。奈良で開催されたこの夏の学校で佐々木晶先生と出会い、いろいろとお話をお聞きし、「大学院では佐々木先生の研究室で宇宙の研究をするぞ!」と心に決めました。大学院の学生さんや佐々木先生と一緒に奈良の遊園地遊びに行った日を懐かしく思います(遊園地は先日閉鎖されてしまいました)。この夏の学校に参加していなければ、今現在の私は存在していないと思います。

修士課程では希望通り東大の佐々木研究室に入り、いよいよ念願の宇宙に関わる研究がスタートしました。テーマは「宇宙風化作用シミュレーション実験」です。鉱物を砕いて自らの手で試料を作成し、真空装置やレーザーを使って実験をする毎日がとても新鮮でした。実験がうまくいかず自分なりに創意工夫を凝らした結果、成功したときの嬉しさは今でもよく覚えています。また、反射スペクトルの実験で憧れのNASDA(現JAXA)に出入りしたり、共同研究者による分析を見せてもらうため他大学に出向き、異なる分野の人達と交流したり、いろいろ刺激的な経験ができました。

修士課程の間で勉強を進めるうちに、物質的な観点から太陽系の起源に迫る研究をしたいと強く思うようになり、博士課程から心機一転、隕石の分野に参入することになりました。昔から多くの方がたくさん研究をしている隕石業界において、自分の居場所を見つけることができるかどうか非常に不安に思うスタートでした。博士課程1年の夏、国際学会のエクスカージョンに参加した帰りのバスの中で、研究人生における第二の出会いがありました。当時産業技術総合研究所(通称:産総研)でコンドリュールの研究をされていた木多紀子博士(現ウィスコンシン大学)とたまたま隣の席になり、これは良いチャンスだと思い、「実はコンドリュールの研究をしたいと思っています」と打ち明けました。これがきっかけで、博士課程2年からコンドリュールの年代測定を行うという具体的なテーマが本格始動し、茨城県つくば市にある産総研近くに移り住み、二次イオン質量分析計(SIMS)の分析技

術を習得するための修行が始まりました。部屋いっぱい広がる巨大な装置を前に、「こんな複雑な装置を自分一人で操れる日が来るのだろうか」という不安な気持ちがSIMSに伝わったのか、最初はなかなかうまく測定できないことも多々ありました。今でも、自由に使いこなせるなんてとても言えるような身ではありませんが、それでもなんとか一人で測定を行えるようになったのは、木多女史の公私に渡るご指導の賜物です。心から感謝しています。年代測定に関しては木多女史、そして隕石学全体の知識に関しては永原裕子教授、と二人の心強い指導教官のおかげで今の私が存在するといっても過言ではありません。特に、隕石業界の膨大なバックグラウンドの情報を網羅しきれていない私にいつもの確かなアドバイスを下さり、時には励ましを、多くは厳しいご指摘を下さった永原先生には本当に感謝しています。将来に悲観して意気消沈気味になったときには叱咤激励もして下さいました。

余談になりますが、大学院入学当初から面見のよい先輩として接してくれ、博士課程2年の3月に入籍してからはつくばと横浜でそれぞれの職場が分かれたがために、毎日往復4時間の通勤を文句も言わずに8ヶ月間付き合ってくれ、博士論文執筆中には多大なるサポートをしてくれた主人(遊星人, Vol.14, no. 1, p. 24-26, 2005参照)にも心から感謝しています。

現在は日本学術振興会特別研究員(PD)として正式には産業技術総合研究所地質情報研究部門マグマ熱水系研究グループに所属しています。しかし、普段は東大の永原研に机をいただき、月に1,2度ほど産総研に足を運ぶ(分析のときは別ですが)という生活スタイルになっています。

博士号を取得できた今、小さい頃からの想いが達成され、初志貫徹で続けてきて良かったと正直ホッとしているところがありますが、実はこれからがスタートだと自分に言い聞かせています。いろいろと横道に首をつっこんで来たからこそ、最終的には本当に面白いと思える分野に出会えたと思っています。まだまだ勉強不足な面が多々ありますが、多くの人に支えられて

今があることを忘れず、いつか「エキスパート」だと胸を張れる日が来るように、日々精進したいと思って

います。最後になりましたが、惑星科学会の皆様、今後ともどうぞよろしく願いいたします。